

中年地域研究者は本の森に迷う

坂田 正三
〔地域研究（ベトナム）〕

「地域研究者」と名乗り禄を食むことはや十余年。職業人としての折り返し地点も過ぎ、来し方行く末に思いをめぐらせるモードに入りつつある。中年を迎えた地域研究者は不安である。記憶力をはじめとするさまざまな能力は衰えはじめ、好奇心も枯れ気味だ。怠け心も歳とともに増すばかり。それなのに、激しく変化する途上国の経済社会状況は地域研究者がモットーとする「丸ごと理解する」にはますます手強くなっている、その断片を切り取って分析しようにも、次々に出てくる最新の理論は複雑化、先鋭化する一方である。そんな時は現実逃避。本の森に立ち寄り、思考とか思想といった抽象度の高い議論に触れて、研究者としての初心にかえれば心の平安が得られるかもしれない。

●カール・R・ポパー『フレームワークの神話——科学と合理性の擁護』未来社、一九九八年

本書は、科学哲学者カール・ポパーの一九五〇年代から七〇年代までの論文や講演録をまとめたものであり、彼の比較的初期の論考に触れることができる。ポパーについては、「反証主義」という科学の方法論をめぐるヴィトゲンシュタインやハーバーマスら論敵との間の論争が有名であるが、本書では科学の方法論や彼が唱えた批判的合理主義といった哲学上の主張に関する論考よりも、知の追求における基本姿勢といったような、いささか規範的な議論が中心的に展開されている。

ポパーは、各々の依って立つディシプリンや学問的な立場、すなわち「フレームワーク」を共有し

ていなければ、あるいはそれに関する合意がなければ議論が成立しないという姿勢を、「神話」であると批判する。学問的なフレームワークは教会や政治的・芸術的信条が行うのと同様に、その信奉者を互いに結びつける心理的・社会的実在に過ぎないと喝破する。

さらにポパーは、西洋中心主義やマルクス主義までフレームワークへの過度の信奉の例として批判する。特にマルクス主義者に対しては手厳しい。マルクス主義者は彼らのフレームワークに対するどんな反論も、自らのフレームワークと一致すると解釈してみせ、それが困難な場合は、その反対論者の階級的偏見から来る劣等感情の代償だと決め付ける、と批判している。

ポパーのこの主張は、論敵たちとのあの（少なくとも本稿筆者に

は）退屈な論争の当事者のものとしては意外に感じるが、ポパーは、討論に勝利すること自体に意味はなく、自分や反対者の立場についての明晰な理解を得られなければ討論に意味はないとまで述べている。この信念ゆえにポパーは知の巨人になり得たのだらう。ポパーが本書で明示的に「寛容」という言葉を使っていないが、われわれ地域研究者もさまざまなディシプリンに対してこの寛容さを常に備えているべきなのであろう。

●イリヤ・プリゴジン／イザベラ・スタンジエール『混沌からの秩序』みすず書房、一九八七年

物理学者だけでなく、中年地域研究者にとってもプリゴジンはあこがれであった。現実社会の混沌のなかに秩序のパターンを見出し理論化することこそが、社会科学の徒にとっても究極の仕事だなどと夢想するからである。しかし、正直に告白すれば、何度チャレンジしても、筆者は本書を最後まで読み通せなかった。世界中でベストセラーになった一般向けの書とはいえ、非線形熱力学という分野は手に余る。

しかし、アルビン・トフラー『第三の波』の著者）による本書のまえがき（「科学と変化」）なら何度が読み返している。それは、お手軽に本書のエッセンスを理解することができるから（というだけ）ではない。このまえがきが、プリゴジンのもたらした科学思想における歴史的な転換の意味を分かりやすく解説してくれるからである。

トフラーの解説によると、一八世紀に完成した「ニュートン主義」科学の体系は、初期条件によってあらゆる事象が決定され、すべての事象は機械の歯車のように組み合わされているという世界観を持つ。この、世界が時計仕掛けであり、安定、秩序、均衡の構造を分析することが科学であるとする思想を覆ったのがプリゴジンの新しいパラダイムである。

「プリゴジン主義」では、実在の事象のほとんどは無秩序、不安定、多様性、非線形（小さな入力が大きき結果の引き金になりうること）からなる「ゆらいで」いる部分系を持っているとされる。そして、このゆらぎはある閾値を境にカオス、すなわち系の分解に向かうかもしれないし、より分化し

た高い秩序の部分系の形成に向かう（自己組織化）こともありうる。この「部分」と「全体」のダイナミックな関係の精緻な理論化は、熱力学という特殊な学問世界にとどまらず、人間の経済活動、たとえば人口と食料の問題や集団による協調行動の分析にも新たな光を与えるものである。

トフラーはさらに、プリゴジンの理論を、エネルギー、資本、労働力の投入を基礎とした産業社会から情報と技術革新を資源とする高度技術社会への移行、すなわち「第三の波」の社会の興隆が起きているという自らの主張に重ね合わせている。

●三中信宏『分類思考の世界』講談社現代新書、二〇〇九年

現役で活躍中の生物学者による歴史書である。本書の著者自身の主張は他の著書にまとめられているようであるが、本書は近代分類学の父カール・フォン・リンネ以来三〇〇年の歴史を持つ生物体系学すなわち「分類学」の歴史のなかの先人たちの功績をつむぎ、生物学の枠を超えて「分類する」という行為自体の意味の変遷を綴っ

ている。

さまざまな自然物を蒐集し博物館に陳列することが学問とされていた時代は一八世紀の啓蒙主義時代に終わり、「記載の科学」は「分類の科学」に転換したという（二一世紀の地域研究者が直面している転換とよく似ているではないか）。以来、目の前のものの構造的パターンを発見して整理することが、自然を理解することと同義となった。

しかしよく知られるように、生物における分類は厄介な作業である。その集合に属するための必要十分条件を挙げるやり方で定義しているのは、カモノハシのような想定外の生物（卵から生まれるが母乳で育つそうだ）が「発見」される、ととたんに混乱に陥る。また、時空を超えてその生物が生物的に「同じ」とみなせるのか（細胞レベルでは昨日の私と今日の私は同一ではない）という問題も議論の種となる。このように、生物学にも自然科学を超えた論理学的あるいは哲学的な問いが常に付きまとっている点がおもしろい。

本書の重要な指摘は、分類する側の認知バイアスである。科学者たちといえども中立的かつ客観的

に物事をみているとは限らない。だからこそ歴史を学ぶことが重要だという。科学史を学ぶということは、現在主流派の学説がどのような文脈で生み出されてきたのを知ることであり、一方、忘却のあなたに置き去りにされた学説について知ることもまた重要である。本書では、旧ソ連時代に誤った学説が政治力を背景に主流化されていたかが描かれていて興味深い。学説が時に研究者コミュニティのダイナミズムや政治・社会的背景により規定されたりもするという事実は常に注意しておくねばならない。

自然科学の思考・思想からは多くの刺激を受け、啓蒙されたような気にもなる。しかし、当たりまえのことだが、抽象度の高い議論は具体的に役立つアドバイスは与えてくれない。どうしたらポパーの寛容性が身に付くのか。どうしたらトフラーのように図々しくノーベル賞学者と自分の説が同じだと主張できるようになるのか。結局、中年地域研究者は本の森のなかで迷うのである。

（さかた　しょうぞう／アジア経済研究　東南アジアⅡ研究グループ）